

以上に多くなかったことによるものと考えられる。この例から、筆者は熱帯稲の高温反応性—たとえば出葉速度の温度による影響の受けかた—が温帯稲と趣きをやや異にするのではないかということと、初期生育の良否を収量性との関連で判定するための基準を、全期間高気温下で経過する熱帯稲の特殊性を考慮に入れた上で再検討する余地があるのではないかということの2点をここに問題提起しておきたい。

引用文献

- (1) Tanaka A. *et al.* “Growth habit of the rice plant in the tropics and its effect on nitrogen response.” *Technical Bulletin*, 3. Los Baños: The International Rice Research Institute, 1964.
- (2) 市村一男ほか「水稻植被が水田の水溫較差におよぼす影響」『農業気象』第20巻, pp. 155～159, 1965.
- (3) 松島省三「マラヤの稲作における稲・土・水の関係についての数種の実験と調査」『東南アジア研究』第2巻第3号, pp. 129～134, 1965.
- (4) 佐本啓智ほか「栽培時期を異にする水稻の生育経過に関する研究」『日本作物学会記事』第27巻, pp. 333～340, 1958.
- (5) 長谷川浩ほか「土壤温度が作物の生育に及ぼす影響」『日本作物学会記事』第29巻, pp. 195～198, 1960. 「土壤温度と作物の生育」『土壤の物理性』第9号, pp. 14～22, 1963.

コメント4

育種とそさいの問題点

長谷川 浩

作物部門における育種とそさいの問題についての討論の大要を述べる。

1. 育 種

最近フィリピンの IRRI で育成された IR-8 は注目される品種であるが、これは他の国にとっては輸入品種であり、栽培に当たっては多くの問題がある。すなわち、IR-8 に対しては、タイなどで多少国民感情からくる反発もあり、育種専門家はこのような輸入品種に対してきわめて冷淡で、むしろ在来種のなかから良い品種を作り出したいとする傾向が強く、収量が高ければどんな品種でも輸入すればよいとする育種専門以外の人々と強く対立している。

東南アジア諸国で育種を行なうに当たっては、IRRI のような国際機関の育成品種を各国で採用してもらうのが本流であるのか、それとも各国で育種をやるべきであるかの問題に対して

次の意見が出された。

(1) 世界的スケールでの育種では、地域的な配慮が払われにくい。技術援助にさいして、種子や品種の贈与が考えられるが、これらは長い目で見るとむしろ間違いをおこすものになることもある。地域的に育種目標をたて、どのような品種を母材に用いて育種をやるかを教えるべきである。

(2) 輸入品種を直接、栽培に供することは、常識としても相当無理で、輸入品種はその国の育種母材であると理解すべきである。

(3) 在来種に必要とする遺伝因子がない場合には、品種の輸入は育種上不可欠であり、また病害抵抗性の問題は、地域的に考えてゆかねばならない。

(4) 育種専門家は品種の輸入に必ずしも反対ではなく、輸入に慎重なのであって、むしろ国民感情のほう輸入品種を拒否しているように思える。

(5) 近年インドでは白葉枯病が問題視されていることからすると、インドで IR-8 が拒否されている真の理由は耐病性の欠陥にあるように思える。

(6) アメリカは国際的育種組織を作るのに熱心で、フランスとイギリスはだいたいそれに反対であるが、各国別にそれぞれ育種試験場を設け、国際機関で育成された品種を十分活用する態勢にまで早く育てあげることが先決である。

2. そ さ い

東南アジアのそさい園芸は相当重要な部門であるのに、これまで技術援助の対象としてあまり採り上げられなかった。その理由としてタイの場合には、そさい生産は華僑に独占されていて、技術協力とはことなる系列に入っていたためであるとの意見が述べられた。またこれまでにはそさい栽培を積極的にやる意欲のなかった者も、実際やらせてみると、たいへん熱心で、技術もよく習得するので、今後はより積極的にそさい園芸の技術を与えるのが望ましく、それには技術水準の高い日本が協力すべきであるとの意見が出された。